

hidarimakiki's 小市民の逆説曲

アナログレコードの逆襲その28
加川良「教訓1」(アルバム「教訓」から)



小市民のかつて悪さを堂々と曲にして歌った加川良はかつていいのである。小市民とは、付和雷同、体勢順応の風見鶏にして、自己責任さえ社会責任に転化させるといふ悪癖を持つけれどなかなか凶太く、家

族を軸にして生活力があり権利意識にもさといのである。過去翼賛政治に安住したため、戦争という体験もしなければならなかったけれど。

一命はひとつ 人生は1回 だから 命を捨てないようにネ あわてると つい フラフラと お国のためなのと 言われるとネ 青くなって しり込みなさい にげなさい かくれなさいー

この「教訓1」のほか、共通するのは卑屈さ、メメしさ、貧乏くささをアルバムテーマとしている。それを人生訓にまで昇華し、今までのままでいいから、たいした夢を欲せず、わが不幸を不幸としてあきらめ、小さく生きていくのが人生だと達観、諦観、厭世するのが「教訓1」の内容であり、アルバムの主旋律である。

ところで加川は果たしてそんな表象を歌っていたのだろうか。僕はどうしても裏読みしてしまう。どこか底意地が悪く、聞くものに挑戦をしてくるような印象があるのだ。そ

れというのも、歌詞自体が小市民そのものを歌っていて、それならことさら歌わなくともよいのにとするわけである。さて彼の歌は小市民のまま生きなさい、死になさいというメッセージで終わっているのだろうか。素直なところ、人はこの社会から逃げたくとも逃げられないし、いつまでも貧乏のままでは終えたくもない。この「教訓1」には無理があるのだ。この後に続く歌詞一命をすてて 男になれと言われた時にはふるえましようヨネーなども、その場でふるえてももう間に合わないわけで、ふるえる前に何か措置をしなければならぬはずなのだから。

たしかに、この歌詞に裏読みをさせるメッセージとしてのメタファー(暗喩)が隠されているようには思えない。あるとすれば当時の時代性、歌手の持つ精神というか背負った空気のようなもの、それは感情的(ここでは怒りや嘆き)なもののように感じるのである。小市民を歌いながら、小市民をおちよくる逆説ソングと見れば納得できる。しかも聞くものへは反小市民の決意を強いてくる強さがあるのだ。

普通に聞き流している分には、おかしく自嘲気味なコミックソングみたいな曲だが、しかし、小市民でいるといずれつまらない人生を歩くことになりますよ、人まねの人生は危ういですよと問うているに相違ないと僕は考える。これは加川良が70年に出したアルバムであり、音楽的寓話集であった。



未開の荒野から
助けを求め声がかかる

天王寺の美術館で催された福沢諭吉展を観た。諭吉が、人間を「じんかん」と読ませ、「人間交際」を、政府(公権力)と「分限」した社会発展の源泉と考えて実践したという紹介に感じ入った。とくに、「分限」という響きが心地よかった。

去年の年頭だったかな?東京のホームレス支援団体の仲間と酒を呑んでいて、ボクは、刑務所に収監されている知的障がい者の話を聞いて愕然とした。まったく微罪の窃盗で逮捕された知的障がい者は、わけのわからない会話が飛び交う公判を他人事として過ごし、一年半の懲役に服した。刑務所での作業について行けなかった彼は、通称「モタ部屋」に放り込まれ、職業訓練もされることなしに、満期出所した。身元引受け人がないため仮釈放にはならなかったのだ。療育手帳を持たない彼は、刑務所で知的障がい者として処せられることはなかった。ほぼ無一文で、身を寄せる所もないまま放浪した彼は、キーのかかっていた車から小銭を盗み、現行犯で逮捕された。そして、再び他人事の公判を経て、累犯だから三年の刑に服した。三年後、彼は、三たびまったく同じストーリーを演じたという。

その夜の酒の仲間は、「福祉に見捨てられたひとで刑務所が飽和状態になっている」と呟いた。こんな事犯を幾例も聞いた。人権とか、社会運動とか、公言している自分が、あまりの無知だったことに言葉を失った。

それから、一年、ボクは、知的障がい者などの「刑余者」の生活再建を支援するネットワークづくりの輪に加わり、この春、「よりそいネットおおさか」という団体が結成され、この9月18日に、相談センターの開所式を兼ねたシンポジウムが催される運びになった。予想を超えて、多くの団体や個人が集まってくれたが、異口同音に「無知」を告白し、非政府・非営利の役割を語っていたことは爽やかだった。この春の結成式のこと新聞報道されるや、服役している弟の出所後を案じるお姉さんからの相談が舞い込んだりしている。

ボクは、知的障がい者の総数を、療育手帳をもとに推計50万人とずっと思っていた。でも、刑余者問題に接してから、実は、その数は300万人ではないかという識者の指摘に同調するようになった。ボクは、障がい者問題の「最初のボタン」をかけ直さないといけなかった。そういえば、この感慨、ずっと前に、初めて長島愛生園というハンセン病の国立療養所を訪問した時と同じものだった。エル・チャレンジを創ろうと思いついた時もそうだった。今更だが、社会問題の奥は深く、ボク達が知らない世界は広い。そして、公権力から「分限」された社会運動の未開の荒野も広い。

(株)ナイス代表取締役 富田一幸